

はじめに
——「テクスチュアリズム」称揚——

A Preface: Revaluating Textualism

研究プロジェクト代表者

土田 知則

Tomonori Tsuchida

本プロジェクトは文学テキストを組成する言説や表象のあり方を具体的なテキストを素材に考察・分析するための試みとして開始された。

文学テキストのアプローチには主として二つの類型が存在する。一つは、テキストをその外部との関わりにおいて、すなわち、社会的・政治的・経済的・文化的等々の背景に照らして考察・分析しようとする立場。作家研究、社会学的研究、新歴史主義的研究などがその代表的なものと考えられるが、これらはいわば「コンテクスチュアリズム (contextualism)」と称してよいだろう。

そして、それに対置されるのが、可能な限りテキストの内に留まり、精緻で創造的な「読み」を実践し続けようとする立場。こちらは一般的に「テクスチュアリズム (textualism)」と呼ぶことが可能だろう。構造主義以降、「テクスチュアリズム」の試みは様々な形で継承され、数々の成果を残してきた。構造主義に発する記号論的分析、ニュー・クリティシズムによる「精読」、ヌーヴェル・クリティックの実践した「テーマ批評」、そしてフランスの哲学者ジャック・デリダを発信源とする「脱構築批評」等々。

両者は相補って文学研究の豊かさを生み出すはずだが、そのバランスが崩れ、後者に対する志向が希薄となる傾向が近年しばしば観察される。そうした傾向を踏まえ、ここに収録された論考は、それぞれの思い描く「テクスチュアリズム」に寄り添い（このことは、「コンテクスチュアリズム」への無関心を意味するものではない）、文学テキストが内包する多様で特異な論理の捩れ、さらにはその躍動的な創造性を明らかにしようとしている。

多くの課題や可能性を予感させるこれらの試みが、文学テキストの考察・分析に不可欠な「精読」という姿勢の重要性を改めて確認する作業となり得ているなら、本プロジェクトの目的はひとまず達成されたと言えるだろう。